特集

シリーズ いしかりの子どもたち①

子どもたちを

いしかり子ども総合支援会議
子育て・次世代育成に関するすべての施策を、総合的に審議する組織。写真は4月25日（火）に行われた第1回の様子。同会議では須永進教授が初代議長を務めています。

管理される子ども
―子どもを取り巻く環境

「子どもたちが変わった」

そんな声をよく耳にするようになりました。長年、石狩で子育てを支援し、子どもが自ら育つ地域づくりを目指してきた「NPO法人こども・コムステーション・いしかり」の藤原市子さんも、その変化を目の当たりにしてきた一人です。いわく「気になるのは、子どもたちの運動能力が低下していることです」

藤原さんが初めてそう感じたのは今から10年ほど前。「お手玉を片手で受けることができない、まりがつけないといった子どもたちが急に増えて、これは器用・不器用という枠だけでは片付けられない問題なのではないかと思うようになったんです」

そうした異変に藤原さんは一つの仮説を立てました。問題は管理しすぎる大人たちにあるのではないか。子どもたちが無心で何かに取り組む「自由な時間」を取り上げていないか。子どもにじっくり付き合う根気がないのではないか。そんな大人たちのゆとりの無さを藤原さんは危惧（きぐ）するのです。

藤原さんはまた、昔の子どもに比べ、今の子どもたちに絶対的に足りないものがあると考えています。それは「体験する場」。「子どもは、さまざまな体験を通して、ほかの子どもたちをまねしながら成長するものです。その意味で、今の子どもたちには成長のための“サンプル”があまりにも少ないのです」。そのため、藤原さんたちは大自然の中でのキャンプや、演劇・音楽の鑑賞会など良質な体験の場の提供に腐心してきました。

中でも忘れられないのが4年前に企画したどろんこ遊び。生振の農家の方に協力を得て借りた田植え前の田んぼは、まだ水も冷たく、子どもたちはなかなか足を入れません。しかし、「いったん慣れると、あの独特の土のねばりが面白いのでしょう、あのときの子どもたちの笑顔は今も忘れません」と藤原さん。「ああいう体験は、大人になってもきっと覚えているはず。そういう体験を子どもたちにいっぱいさせてあげたいんです。それには地域の理解と協力が絶対に必要です」

藤原　市子 氏
（ふじわら　いちこ）
「NPO法人こども・コムステーション・いしかり」理事長。1981年に同法人の前身となる「石狩おやこ劇場」を立ち上げ、以来、石狩市を拠点に芸術体験・自然体験などを通して「こどもの居場所づくり」を進めます。一女二男の母。

めぐる環境

今、子育ての現場で危機感を持つ人々が増えています。その声に耳を傾けると、求められているのは人と人とのつながりでした。

市川　啓子 氏
（いちかわ　けいこ）
臨床心理士。障がい児教育等に携わり、現在は石狩市こども相談センターのセンター長として、また札幌学院大学人文学部教授、北海道家庭教育カウンセラーとして活躍中。

孤独な子育て―親を取り巻く環境

「自分はわが子を虐待しているのではないでしょうか…」

市のこども相談センターには542件（平成17年度）にも及ぶ相談が寄せられますが、最近増えてきているのは、先のような母親からの相談です。

4月から同センターのセンター長を務める臨床心理士の市川啓子さんは、こうした事態を次のように受け止めています。

「子どもの自我が育ってくるのが3歳から小学校低学年にかけて。ちょうどこの時期のお子さんを抱える親御さんが、子どもに対して自分の感情がコントロールできないといって悩むケースが多いのです。これは極端な言い方をすれば、子育てが密室で行われていることが原因でしょう」

密室とは、虐待の多くが親と子だけの空間で行われているということを例えたもの。とはいえ、これは裏を返すと「その親たちのほとんどが複数の目の見つめる前では子を虐待しない、ということでもあります」と市川さんは補足します。

「本来、人間の子育ては集団で行われるもの。昔は子どもの周りに親のほかにも多くの大人たちがいました。そういう中で子どもは大きくなったものです。でも今はそれが難しくなっているんですね」

センターでは、この現状を真っ向から否定するのではなく、まずは現実として受け止め、悩める親たちの話をじっくり聞くことを大切にしています。そして、この相談業務に加え、4月からは地域全体で児童虐待や不登校などの問題を考えようと**こども見守りネットワーク協議会**も始まりました。

「『どうして自分だけ？』といった閉塞（へいそく）感を抱えて子育てに奮闘する親たちが増えています。この危機的状況を打破するには、地域の皆さんにも子育てを手伝ってもらいたいのです。その環境づくりを積極的に行っていきます」